

学級の集団力を高める特別活動に関する研究

—— 生徒理解と学級活動の取り組みを中心に ——

小林 伸朗*・新井 英靖**

(2024年12月24日受理)

Consideration of Educational Practice about Group Activity in School
to Sustain Social Bond in Classroom

—Focus on the methods of understanding of students and classroom activity—

Nobuo KOBAYASHI and Hideyasu ARAI

キーワード:特別活動、学級活動、集団の教育力、中学校

社会が急速に変化する中で、子どもたちに対する教育課題も変化している。特に、現代においては、集団のなかで課題を解決する力や集団のなかで自己を表現する力を育てていくことが重要であるが、こうした教育を実践するうえで、特別活動(学級活動)の果たす役割がととも大きい。本稿では、こうした課題意識のもと、中学校における生徒理解の方法を検討したうえで、一人ひとりの「思い」を大切にしながら学級という集団を発展させていくことができるような特別活動(学級活動)の方法を検討した。その結果、構成的グループエンカウンターなどのアプローチを参考にしながら、生徒が自己を見つめ、他者とのやりとりのなかで集団のなかに自己を位置づけられるように支援をしていくことが重要であるということが明らかになった。今後、社会がより流動的になっていく時代において、特別活動のような学習時間はますます重要になってくると考える。

はじめに

平成29年に告示された中学校学習指導要領では、「生産年齢人口の減少、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等により、社会構造や雇用環境は大きく、また急速に変化しており、予測が困難な時代となっている」という時代認識のもと、「学校教育には、子供たちが様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していくことや、様々な情報を見極め知識の概念的な理解を実現し情報を再構成するなどして新たな価値につなげていくこと、複雑な状況変化の中で目的を再構築することができるようにすること」が求められている(文部科学省, 2018)。こうしたなかで、特別活動においては、『「なすことによって学ぶ」ことを方法原理とし、各学校において特色あ

*那珂郡東海村立東海中学校 **茨城大学教育学部

る取組が進められているが、各活動・学校行事において身に付けるべき資質・能力は何なのか、どのような学習過程を経ることにより資質・能力の向上につながるのかということが必ずしも意識されないまま指導が行われてきたという実態も見られる」という現状認識がされている。そして、「様々な構成の集団から学校生活を捉え、課題の発見や解決を行い、よりよい集団や学校生活を目指して様々に行われる活動の総体」である特別活動の特性を生かして、「人間関係形成」、「社会参画」、「自己実現」の三つを柱にして指導することが重要であると指摘されている（文部科学省, 2018）。

一方、コロナ禍以降、日本の学校教育では不登校児童生徒の増加が顕著となっている。すなわち、令和6年10月に文部科学省から出された「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果の概要」では、小・中学校における不登校児童生徒数は346,482人となっていて、前年度から47,434人（15.9%）増加しており（11年連続で増加）、過去最多となっている¹⁾。また、増加率は前年度と比較して若干低くなったものの（R4年度22.1% → R5年度15.9%）、在籍児童生徒に占める不登校児童生徒の割合は3.7%（前年度3.2%）と深刻な状況である。

なお、不登校となっている児童生徒の実態としては、小・中学校においては、「学校生活に対してやる気が出ない等の相談があった。」（32.2%）が最も多く、続いて「不安・抑うつ等の相談があった。」（23.1%）、「生活リズムの不調に関する相談があった。」（23.0%）という報告が多く、「学業の不振や頻繁な宿題の未提出が見られた。」（15.2%）、「いじめ被害を除く友人関係をめぐる問題の情報や相談があった。」（13.3%）という理由よりも多いことが特徴的であった。これは、単に個別的に学習支援をすれば不登校が減少していくという状況でもなく、また、いじめ対応を含めた子どもたちの人間関係を調整していけば不登校が減少していくということでもないことを意味している。そうではなく、特別活動をはじめとして、学校の教育活動のなかで、集団のなかで人と関係を築きながら、充実した時間を過ごすことができるような学びを展開していくことが必要な状況であると考え。特に、中学校においては、不登校となっている生徒数も多いことから、学級活動などの特別活動を意図的・計画的に実施していくことが急務であるといえる。

研究の目的

そこで、本研究では、中学校の特別活動（学級活動）を取り上げ、人間関係力を身に付けていくことができる学習活動のあり方について検討することを目的とした。これまでの先行研究としては、土屋ら（2018）、久保田ら（2018）、平野（2019）、山田（2020）、小坂ら（2021）などがあるが、学級の集団力を活かした特別活動（学級活動）について論じているものは少ない。そのため、本稿では、特別活動（学級活動）を通して、生徒理解を深め、集団の教育力を活かした指導方法について研究することとした。

研究の方法

特別活動（学級活動）における指導方法を検討するにあたり、Q-Uテスト等を用いて生徒理解の方法を概観した上で、集団学習体験を通した特別活動（学級経営）の学習指導案を提案する。

生徒理解を深める方法と集団の教育力を活かした学級活動の展開

学校における集団の中でとくに学級は、所属するメンバーの行動や態度、感情に影響を与える機能を持ち、学習や人格の形成の場である。したがって、教育課題や発達課題を達成する場として、学級集団を大いに活用すべきと考える。その考えから集団を通してその生徒を理解することが重要となってくる。同様に生徒の思いを生かす方策は学級の存在なくしては考えにくく、人間関係を養い、自己を確立する場所となる力を持つような学級を育てることが重要であると考えた。こうした中で、以下のような生徒理解を進めていくことが効果的であると考えた。

1. 集団のなかで個の思いを理解する

(1) 生徒理解を一個人としてとらえるだけでなく、集団の中から見ただけでなく、生徒を多面的にとらえ具体的な援助方法を見つける。

例：質問紙法（Q-Uテスト）を中心に、その理解方法を加味することで、生徒理解に深まりをもたせる。

(2) 集団の教育力を使った生徒の支援・援助法を調べ、その有効性を検証する。

例：構成的グループエンカウンター（SGE）を活用する。これは、情意面の変容に有効とされているものである。その他にも行動面の変容に有効とされているグループワークト・レーニング（GWT）やソーシャルスキルトレーニング（SST）についても取り入れる。

2. 多様な方法で生徒を深く理解する

(1) さまざまな生徒理解の方法

集団のなかで個の思いを理解するために、教師はさまざまな方法を用いている。その代表的なものを挙げると以下のようなになる。

①観察法：生徒の行動を注意深く見て、その行動の特徴や態度をはじめ、心理的特質を見極めて理解する方法として以下の二つが考えられる（表1）。

表1 観察による生徒理解の方法

参加観察	教師が生徒の集団の成員として役割行動をとりながら、観察を行う。
自然的観察	行事活動や休み時間など生徒がどのような行動をしているか、生徒のありのままの様子を教師が深く観察していく試み。

②面接法：あらかじめ設定した場所で、教師が子どもと向かい合い、質問したり、何かの作業をやらせたりして、それに対して児童・生徒がどのように答えるか、また、どのように行動するか観察する方法として以下の二つが考えられる（表2）。

表2 面接法を用いた生徒理解の方法

調査面接法	特定の部屋で子どもと面接を行い、語り合ったり質問したりして子どもの過去から現在に至るまでの情報を収集する調査法。
相談面接法	教師側から主導的に質問することなく、子どもの話に耳を傾け、そこをじっくり聞き、必要な質問を、その場その場で加えていく方法。

- ③質問紙調査法：複数の質問項目に回答してもらい、その結果を統計的に分析し、個人や集団の意識、感情などの傾向を推し量っていく方法として以下の三つが考えられる（表3）。

表3 質問紙調査法による生徒理解の方法

ゲス・フー・テスト	実際の行動を対象にして、児童・生徒のクラスや家庭での地位を測定するテスト。
ソシオメトリックテスト	集団成員間の好き嫌いといった感情を調べることによって、人間の心理的関係をはかるテスト。
Q-Uテスト	「学級満足度尺度」と言われ、児童・生徒たちの学級生活の満足感という内面的世界を捉えることを目的としたテスト。承認得点（学級の中で自分が認められているか）と非侵害得点（学級の中でいじめや悪ふざけなどを受けているか）の2つを組み合わせで測定する。

- ④創作物を用いた方法：子どもの喜びや悩み、願望、欲求などを読み取るために、日記・作文等でその心理状態を評価する方法もある。

(2) 生徒理解における留意点

上記の方法のうち（Q-Uテスト）法で学級において生徒がどのくらい満足しているかを把握する際の留意点をまとめると表4のようになる。

表4 Q-Uテストにおける生徒理解の留意点

先入観	教師は経験が深まれば深まるほど見る目が養われていく。しかし、一方ではその見る目が狭まる危険性も含んでいる。常に広い視野で物事をとらえていく必要がある。
複層性	一つの出来事を一つの判断で決めつけるのではなく、いろいろな考えをもつてみる必要がある。
固着性	一度その認識をすると、その後もその認識から物事をとらえてしまうこと。いろいろな視点から物事をとらえる必要がある。
対象化	一度理解した事柄をそれ以上深入りしないことは危険である。表面上だけでとらえて満足するのではなく、深まりがもてるようにしなければならない。

もちろん、教師はいろいろな方法を用いて理解するばかりでなく、普段から生徒と接し理解を深めていく必要がある。日常における生徒理解（主観的理解）を深めるためにも、教師は自己理解に努め、不適切な思いこみを改善していく姿勢を持たなければならない。

集団教育力を生かした生徒の支援・援助法

集団の教育力を生かした生徒の支援・援助方法としては、構成的グループエンカウンターやグループワーク（GWT）・トレーニング、ソーシャルスキル・トレーニング（SST）などがある。それぞれの方法をまとめると以下のように整理できる（表5・表6・表7）。

表5 構成的グループエンカウンターの手法を用いた学級活動の展開²⁾

名称	構成的グループエンカウンター
概要	構成的グループエンカウンター（Structured Group Encounter、略称SGE）とは片野智治氏によると「集中的グループ経験の一つと考えられる。これは開発的カウンセリングの一技法として、人間関係開発やサイコ・エジュケーションの一方法として用いられている。また、人間関係を基盤とする、様々な日常的な教育場面で応用されている。」と定義されている。
目的	集団学習体験を通して、行動の変容と人間的な自己成長（主に6つの観点、自己理解、他者理解、自己受容、自己主張、信頼関係、感受性の促進）を目的としている。
学校における効果	<ul style="list-style-type: none"> ○不登校・いじめの予防効果 ○コミュニケーションづくりの効果 ○教師と生徒のリレーションづくりの効果 ○各エクササイズの特徴による効果 ○「生きる力」を育む
主な展開例	<ol style="list-style-type: none"> 1. ねらいの明示 2. インストラクション（導入）の実施 3. デモンストレーション（お手本）の実施 4. エクササイズ（課題）の展開 5. 必要時のインターベンション（介入）の実行 6. シェアリング（わかちあい）の実施 7. フィードバック（定着）の実施
実施上の留意点	（ア）エクササイズに対してリーダーは生徒がポジティブな感情や認知をもてるようにし、モチベーションを高める。また、エクササイズの配列・順序は抵抗が起こらないようにすること、徐々に真相に迫っていくようにする。

	<p>(イ) エクササイズを選択するときは、学校行事・学級活動に関連させて行えるとよい。</p> <p>(ウ) リーダー同士の連携・情報交換を密にする。</p> <p>(エ) リーダーは生徒の自己開示とフィードバックを促進する。</p> <p>(オ) リーダーは、場面に応じて示唆、助言、説明、教示、コメントなどの介入活動を行う。</p>
--	---

表6 グループワーク・トレーニング（略称GWT）の手法を用いた学級活動³⁾

名称	グループワーク・トレーニング（略称GWT）
概要	P. B. スミスによれば、「グループそのものを活用資源としてトレーナーがグループに働きかけ、グループ過程をとおり、グループの力動、相互作用を利用して、メンバーの人的成長をはかり、彼らの思考、態度、行動、感情に変化を起こさせるとともに、社会的適応をはかる教育的、または治療的な過程」と定義されている。そしてそれを学ぶことをグループワーク・トレーニングと呼んでいる（スミス,1984）。
目的	GWT 研究会によれば「できるだけリラックスした雰囲気の中で自分の姿に気づき、自らの態度、行動を変容させていくこと」を目的としている。
学校における効果	<p>○生徒一人一人が一つの質問に意見をもち、教師もそれがわかり、生徒の発言を待つことができるようになった。</p> <p>○グループ活動時に生徒がどんな動きをしているかわかるようになった。</p> <p>○生徒が自分の行動を客観的に判断できるようになり、教師も具体的なアドバイスができるようになった。</p> <p>○教師自身の枠が広がり、生徒の行動に生かすことができるようになった。</p>
主な展開例	<ol style="list-style-type: none"> 1. ねらい、ルールの説明 2. 実習（教師は参加者の様子を細かく観察する） 3. 結果発表 4. ふり返り 5. ふり返りの内容発表 6. 教師がコメントをつけ、小講義を行い一般化を図る。 7. 再び同じねらいのGWTを行い、定着化を図る。
実施上の留意点	<p>(ア) ねらいを決め、それにあったトレーニング内容を選ぶ。</p> <p>(イ) GWT 実施中の各グループの動きにおいて、生徒一人一人の感情や気持ちの流れまでを含め、よく観察する。</p> <p>(ウ) 観察を通して、あくまでも生徒達の主体性を尊重しながら、何らかの援助を必要と感じた場合、阻害要因や促進要因の指摘、明確化、勇気づけを行う。</p>

表7 ソーシャルスキルトレーニング (SST) の手法を用いた学級活動⁴⁾

名称	ソーシャルスキル
概要	人間関係において、良好な関係を形成し、それを維持していくために必要な知識をもっていて、人間関係に関する具体的なコツや技術を総称して、ソーシャルスキルという。
目的	人間関係がうまくもてない、自分の気持ちがうまく伝えられない子ども達に、具体的・実践的かつ効果的な方法を子ども達に教えることを目的としている。
ソーシャルスキルの構成要素	○人間関係についての基本的な知識 ○他者の思考と感情の理解の仕方 ○自分の思考と感情の伝え方 ○人間関係の問題を解決する方法
主な展開例	子ども達は「言語的教示」「オペラントの条件付け」「モデリング」「リハーサル」を通して SST を獲得していく。 1. インストラクション (言語的教示) なぜそのスキルと取り上げるか重要性を気づかせ子ども達の動機を高める。同時に言葉によってスキルを教える。 2. モデリング 教えようとするスキルのモデルを示し、それを観察させ、模倣させること。 3. リハーサル インストラクションやモデリングで示した適切なスキルを、子どもの頭の中、あるいは実際の行動で何回も繰り返し反復させること。 4. フィードバック 子どもが、インストラクションに従って実行した行動や、モデリングやリハーサルで示した行動に対して、適切である場合にはほめ、不適切である場合は修正を加えること。 5. 定着化 教えたスキルが日常生活で実践されるよう促すこと
実施上の留意点	(ア) 楽しい雰囲気で行う。 (イ) ソーシャルスキル教育は問題の予防の観点から、学級内で問題がある場合は、その問題を解決してから行う。 (ウ) 教師と生徒の関係が良好の状態を保っておく。 (エ) 不安や怒りなど感情の問題を抱えている場合は、その問題の解消を優先に行うプログラムをたてる。

集団学習体験を通じた特別活動(学級活動)の学習指導案の提案

以上のような集団の教育力を活かした学級活動を具体的に実践するために、以下のような学習指導案を立案した。

第2学年5組 学級活動指導案

指導者 小林伸朗

1. 題材名 集団学習体験を通して自己成長をはかろう

2. 題材設定の理由

中学生の時期は自己意識が広がり深まっていく時期である。つまり、親からの心的離乳、自己の発見など、自分を深く見つめる時期と考えられる。そのため、周囲にいる者が正しい対応をしなければ、自分を否定的に見たり、他者の目を気にして自分らしさを発揮できないおそれが十分に考えられる。

本学級に目を向けてみると、合唱コンクールなど行事活動においては小グループのリーダーが率先して取り組み、クラスの団結力を十分に発揮することができていた。しかし、日常生活において、他者の目を気にして自分の考えを主張したり、行動に移したりする姿が少ないのも事実である。アンケート結果を見ても学級生活を満足している生徒は全体の22%で、それ以外の生徒はクラスメイトから認められていない、周りの目が気になり少なからず影響を感じているという生徒がほとんどであった。

自己を知ること、他者を理解することは今の社会を生き、これからの社会を生きるのに必要なことだと考える。つまり、今の時期にこそ自己理解・他者理解の方法を体験することが大切なのではないだろうか。そこで、自己や他者(グループメンバー)のものの考え・見方をグループ活動を通して体験的に学ばせ、そしてその体験がこれからの成長過程に役立つことを目的として本題材を設定した。

〈学級満足度アンケート結果〉

学級が楽しいと感じている (9名)

クラスで自分の存在を認められていないと思う (16名)

クラスで自分の存在を認められていないと思うし、周囲の目も気になる (9名)

クラスで認められていると思うが周囲の目が気になる (4名)

3. 指導のねらい

集団学習体験を通して、行動の変容と人間的な自己成長をねらいとする。

4. 事前の指導と活動

(1) 9月〇日 「学級生活満足度」についてのアンケート実施

(2) 10月〇日 学級活動 グループで協力して一つの作品を作り上げる

(3) 11月〇日 学級活動 グループで協力して課題を解く

5. 本時の指導と活動

(1) 活動のテーマ 「月世界（月からの脱出）」

(2) 本時のねらい

個人の決定から全員の合意によるグループ決定を通して、グループが意思決定することの難しさ、大切さを体験的に学び、自己の成長に役立たせようとする態度を育成する。

(3) 展開

学習活動・内容	援助指導の手立て (◎は評価)	
<p>1. 本時の活動について知る。</p> <table border="1" data-bbox="256 622 778 674"> <tr> <td data-bbox="256 622 778 674">月世界（月からの脱出）に挑戦しよう</td> </tr> </table> <p>2. ワークシートを用いて、自分で母船にたどり着くのに必要性の高いものを順位付けする。</p> <p>3. グループ内で各自がつけた順位を発表する。</p> <p>4. グループで話し合い、グループとしての順位を決める。 〈話し合いのルール〉 ○安易に妥協しない。 ○多数決や平均値でつけない ○少数意見に十分に耳を傾ける</p> <p>5. グループでつけた順位を発表する。</p> <p>6. グループ内で今日の活動の感想を話し合う。</p> <p>7. グループで出てきた感想を全体に発表する。</p>	月世界（月からの脱出）に挑戦しよう	<p>○本時の活動の目的を明確に伝える。 ・自分の考えをまとめ、それを他者に理解してもらい、また、他者の考えも理解することの大切さを体験することを目的とする。</p> <p>○ワークシートのやり方を理解できたか確認し、わからない生徒にはグループ内で教え合い確認させる。</p> <p>○生徒同士が相談することなく、自分の考えを率直に書けるようにする。</p> <p>○グループ内での発表方法や順番は生徒に考えさせる。</p> <p>○グループ内での発表方法や順番は生徒に考えさせる。</p> <p>○ルールを守り、話し合いに深まりがもてるようにする。</p> <p>○机間巡視しながら、メンバー全員が話し合いに参加できるよう配慮する。</p> <p>○順位付けがうまくできなくても、その過程を大切にさせる。</p> <p>○自分が感じたことを素直に表現すれば良いことを伝え、抵抗なく発表できるよう援助する。</p> <p>◎今日の体験がどのような心の変化につながったか、発表や観察で評価する。</p>
月世界（月からの脱出）に挑戦しよう		

6. 事後の指導とその活用

再度、学級満足度のアンケートをとり、各自の変容を調べる。また、その結果から今後、どのような体験活動を積み重ねていくか検討し、実践していく。

以上のような学級活動を通して、集団の教育力を生かした生徒指導の方法は、今後、ますます重要になってくると考える。特に、現在の学校生活に目を向けてみると、友達とのつきあい方に悩み登校しぶりをする生徒、学校生活になじめずに自分勝手な行動をする生徒、自分を取り巻く諸問題にうまく対応することができず自暴自棄になってしまう生徒、そして表面上は何事もないようにしながら一人心を痛めている生徒など、一人一人がそれぞれいろいろな思いをもって日々過ごしている様子が感じられる。

また、学級王国・学年セクトからの脱却を目指した生徒指導の充実や、心のケアにも重点を置きスクールカウンセラーを積極的に活用し、カウンセリング活動を取り入れることも重要である。しかし生徒たちの声を十分に聴き取れるために、クラスのなかで自分の気持ちを表現できる生徒に育てていくことが重要であり、学級担任は生徒一人一人に目を向けて援助する必要があると考える。

教師であれば誰も、生徒一人一人の成長と発達を願うものである。そしてそのために日々できるだけよい支援・援助をしようと努力している。この支援・援助を効果的に生かすためには生徒理解が不可欠である。生徒一人一人の思いを理解できて初めてそれぞれ個に応じた方法を考えることができるからである。このとき、特別活動（学級活動）は、生徒理解とともに、集団のなかで自己を表現することができる時間となるため、現代社会に生きる子どもにとって大きな意味をもつ学習の時間となるだろう。

すなわち、現代社会は高度情報化、国際化、少子化など激しく変化し続けてきている。その結果、子どもたちに豊かな学びを自然にもたらしてくれた集団が見られなくなっている。家庭や地域社会での教育力も揺れ動いている。そのため生徒理解を通して支援・援助することは、生徒一人一人が一人の人間として社会の人々と上手に適応しながら、なおかつ自己実現に向け努力していく力を伸ばすことにつながっていくと考える。こうした点からも、集団の教育力を生かした特別活動（学級活動）を充実させていくことはとても重要であると考えられる。

注

- 1) 文部科学省「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果の概要」(https://www.mext.go.jp/content/20241031-mxt_jidou02-100002753_2_2.pdf, 2024年12月20日22時44分閲覧)
- 2) 構成的グループエンカウンター の概要については、國分（1996、2000）を参考にした。
- 3) グループワークトレーニングの概要については、坂野（1988）を参考にした。
- 4) ソーシャルスキルトレーニングの概要については、國分（1999）を参考にした。

引用文献

久保田治助・土屋雅宏・帖佐尚人. 2018. 「特別活動における主体的・対話的な深い学びのための指導方法と評価に関する研究：『創造的な学び』による中学校での学級活動指導案の開発」. 『鹿児島国際大学福祉社会学部論集』第36巻第4号、26-36.

- 國分康孝. 1996. 『エンカウンターで学級が変わる 中学校編』 図書文化社.
- 國分康孝. 1999. 『ソーシャルスキル教育で子どもが変わる 小学校』 図書文化社.
- 國分康孝. 2000. 『エンカウンターとは何か―教師が学校で生かすために―』 図書文化社.
- 小坂博嗣・園田雪絵. 2021. 「中学校における人間関係を形成するプログラムの開発一人・もの・ことの出あいを学習資源として―」. 『鳴門教育大学学校教育研究紀要』 第35巻、111-119.
- スミス, P. B. 岡村二郎訳. 1984. 『小集団活動と人格変容』 北大路書房.
- 土屋雅宏・川上慎一郎・眞邊剛・入江将紀. 2018. 「創造的な学びのある中学校特別活動（学級活動）の在り方」. 『鹿児島大学教育学部教育実践紀要』 第27巻、513-522.
- 平野達郎. 2019. 「中学校における学級経営の構造的視点からの検討」. 『学級経営心理学研究』 第8巻、1-15.
- 文部科学省. 2018. 「中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別活動編」（平成29年7月版）.
- 山田真紀. 2020. 「中学校における学級活動『話し合い活動』の導入に関するアクションリサーチ」. 『椛山女学園大学教育学部紀要』 第13巻、73-85.